

特集用・宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第21話

ピョートルとエカテリーナⅡ ロシア

サンクトペテルブルグはロシア皇帝ピョートル大帝が1703年から20年の歳月をかけ、大河ネバ川のデルタに創建した港湾都市である。それはヨーロッパ諸国を見渡した時、旧態依然とした自国を一刻も早く西欧に比肩せねばならないと考え、世界に向けて開いた扉なのである。サンクトペテルブルグはまたロシア革命の地であり帝政ロシア終焉の地でもある。

1712年ようやく大工事が終わりロシアの首都はモスクワから、ここサンクトペテルブルグへ遷都した。



ネバ川の河口にあるサンクトペテルブルグ

ロシアの歴史を垣間見ると16世紀雷帝と呼ばれたイヴァン四世は自らをツァー（皇帝）と位置づけ、これまで権勢をほしいままにしていた封建的な貴族や、国民に対し大きな影響力を持っている僧侶の勢力を抑えつけ、また農奴制の徹底や軍隊の強化を図るなどロシアの基礎を固めた。雷帝は対外的には国土を広めイギリスとの交易を行うなど歴代皇帝の中でも突出した存在感がある。

ところが雷帝亡き後は帝位を巡り国内の混乱がしばらく続くことになる。1613年ミハイル・ロマノフが皇帝に即位しロマノフ朝を打ち立て、それまでの乱れを治め世情を鎮めた。

ミハイル・ロマノフの孫であるピョートル大帝（1672年～1725年）は、即位するや先進諸国であるイギリスやオランダを訪れ、自ら造船技術や解剖学など諸々を学び、そして多くのヨーロッパ諸国の技術者や専門家を招くなどして、立ち遅れていたロシアの西欧化を強力に推し進めたのである。

大帝は軍備の整備拡大を急ぎ、後に日本と開戦することになるバルティック艦隊を創設した。重商主義政策をとり税制を改革し国庫収入の増加を目論み、また資源開発や軍需工業の振興、貿易の奨励など思い切った改革を推し進めた。さらに教会を皇帝の権力下に置くなど教会改革にも手をつけた。

大帝はこれまでの封建的な貴族会議を廃止し、有能な者を集め側近政治を行うなどロシアの政治・経済・社会のあらゆる側面に大ナタを振るい権力のすべてを皇帝の下に治めたのである。



ピョートルが寝起きしていた丸太小屋

サンクトペテルブルグの地はまったくの原野で、この地に新しい都を築くことは大変なことであった。今でこそ北のベニスなどと言われ美しい都市景観を呈しているが、建設当時は大帝自らがネバ川のほとりに今も残る「ピョートルの小屋」と呼ばれる丸太小屋に8年間も寝泊まりして新都市建設に心血を注いだのである。建設に携わった多くの労働者の艱難辛苦は推して知るべしである。

サンクトペテルブルグはペテルブルグ、ペトログラードさらにロシア革命の立役者であるレーニンの名をとってレニングラードとした。そして現在のサンクトペテルブルグと呼び名はかわったのである。余談だがここは現ロシア大統領プーチンの出身地でもある。

文春文庫“ロシアについて”司馬遼太郎著に大阪の伝兵衛がカムチャッカに流れ着きピョートルに拝謁し、イルクーツクに官立日本語学校を開いたとある。ちょんまげ姿の日本人がピョートル大帝に謁見したことを思い浮かべると、なんだかほほえましくロマンを感じるのである。



ネバ川の対岸はロシア皇帝の冬宮

サンクトペテルブルグはパステルカラーの美しい気品のある大都会である。とうとうと流れるネバ川の川面に影を写す世界第一級の美術館であるエルミターージュ（仏語で隠れ家の意）は、淡いブルーに彩られた美しい建物である。ここはかつて冬宮と呼ばれ皇帝の居住する宮殿であった。

市内には料理ビーフ・ストロガノフの名で知られる、ストロガノフ伯爵を始めとする貴族や富豪の邸宅、教会等パステルカラーに美しく彩られた建物が多く、しかも川や運河が市内を縦横に走る様は北のベニスと呼ばれる所以であるが、本家ベニスよりも通りも運河も広く、おおらかでゆったりしている。



ストロガノフ伯爵邸

市内には要塞や博物館、歴史に残る教会、革命に一役買ったかつてのバルチック艦隊の戦艦など見どころは多い。新都市建設を成したピョートル大帝を讃える叙事詩を、ロシアの大詩人プーシキンが「青銅の騎士」と題し謳いあげている。“この地こそ西欧への窓をうち開き”とピョートルの建設の目的を詩の中にも織り込んでいる。

堂々たるピョートル大帝の騎馬像は青銅の騎士像と名付けられ冬宮広場に聳えるがごとくある。



青銅の騎士像

青銅の騎士像はエカテリーナ2世が造ったのであるが、騎馬像の載っている花崗岩の台座も有名で、フィンランド産の1600トンもの巨石を100頭の馬に引かせてここに運びこんだという。巨額の費用と年月が費やされたことは言うまでもない。

ロシアにはピョートル大帝に劣らず、国を富み栄えさせた女帝がいる。エカテリーナ二世（1729年～1796年）である。女帝エカテリーナ二世は生粋のドイツ人でピョートル3世に嫁ぎ後にロシアの女帝となった女傑である。ピョートル大帝の死後国内政治が混乱するが、エカテリーナ2世がピョートル大帝の跡を継ぎ更なる改革に情熱を傾けた。

エカテリーナ2世はフランスのヴォルテールやデイドロと親交があり文通などを通し啓蒙思想（ヨーロッパで16世紀に起こり18世紀後半に全盛期に達した革新的思想運動。合理主義に基づいて伝統と偏見を打破しようとした。新明快国語辞典より引用）の影響を受けてロシアの改革に取り組んだ。

1773年ヴォルガ流域で発生したドンコサックの大反乱“プガチョフの乱”は農奴制廃止を掲げたコサック（中央アジア・西アジア・シベリアなどに住む民族。タタールとスラブの混血の遊牧民の勇猛な騎兵で、ドンコサックとウクライナコサックの二つがある）や工場労働者、炭鉱夫、農民などによる一揆であるが2年後に鎮圧された。これを契機にエカテリーナ2世は中央政権の体制を一層強化する。

また領土拡大にも意欲を示し、オスマントルコとの戦いに勝利しクリミア半島を勝ちとるなど、黒海の支配権を手にした。シベリア全土もロシア領となり東方への進出の足掛かりを築くことになる。その結果日本へ通商を求めラックスマンを派遣している。このことは井上靖著“おろしあ国酔夢譚”の小説にかかっているが日本人漂流民大黒屋光太夫にエカテリーナ2世が謁見し通商交渉の船に乗せ日本へ送り返し、日本の固く閉ざしている扉を開かせようとしている。さらにプロイセンとオーストリアとロシアの三国でポーランドを分け合いポーランドは国として消滅してしまう。教育文化面でも大きな業績を上げている、ロシア語辞典を編纂し、女子貴族の学校を設立するなど、



エルミタージュ美術館



美術館内部

また買い集めた多くの美術品は今日のエルミタージュ美術館の礎となっている。文筆にも優れ回想録や童話や戯曲などの作品を残している。

エカテリーナ 2 世は男勝りで派手好みであるが私生活では公認の愛人が 10 名ほどもいたという。自身の孫であるニコライ 1 世から“玉座の娼婦”と揶揄されている。

連綿と続く帝政ロシアの皇帝ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ロマノフは 1917 年ロシアの 3 月革命により退位しここに帝政は途絶えたのである。最後の皇帝ニコライは 1918 年ボルシェヴィキによって殺害された。